

第四問 『文選』謝靈運

【書き下し文】

樵隱せういんとも俱に山に在るも 由来事は同じからず

同じからざるは一事に非ず 痾やまひを養ふも亦た園中

園中ふんざつ氛しりぞ雑を屏せいくわうせんざうけ 清曠遠風を招く

室を卜ぼくして北の阜をかに倚より 扉ひらを啓ひらきて南の江かはに面す

澗たにがはを激せきとめて井くに汲むむに代へ 槿むくげを挿うゑて墉かきに列つらなるに当つ

群木つらな既に戸つらなに羅つらなり 衆山亦た窓まに対す

靡びい迤おもむとして下田てうていに趨むき 迢遞てうていとして高峰みを瞰みる

欲すくを寡まなくして労を期せず 事に即して人の功罕まれなり

唯しやうせいだ蔣生みちの徑みちを開ひらき 永きうやうく求羊あとの蹤おもを懐おもふ

賞心忘るべからず 妙善こひねが冀よはくは能よく同ともにせんことを

【現代語訳】

木こりと隠者とはともにこの山中に住んでいるが、もとより彼等の理由は同じではない。同じでないことは一つのことだけではない。都の生活で疲れた心身を癒やすのもまた庭園のある住居である。

その住居では俗世のわずらわしさを遠ざけ、清らかで広々とした空間が遠くから吹く風を受け入れる。

土地の吉凶を占って住居を建てる場所を決め、北の丘に倚りかかるようにして建て、門の扉を南の川に面して開く。

谷川を堰き止めて水を引き、井戸水を汲む代わりにし、槿の木を植えて連ねて土塀の代わりにする。

木々がすでに戸口に連なり、山々も窓に相對している。

うねうねとつらなり続く下田に赴き、はるか遠くに連なる高い峰を仰ぎ見る。

欲を抑えて手間をかけることをしない。物事はあるがままに人の手をかけすぎない。

ただ漢の蒋生のように友人を招く小道を開き、親友であった求仲・羊仲の故事を永く慕わしく思っている。

美しい景色を愛でる心を忘れられない。この上ない幸福として願うことには友と共に楽しむことができることを。